

現象文 〈 Le facteur qui passe ! 〉 について

—VOILA <名詞句+関係節> との比較をもとに

津田洋子
(京都大学大学院)

単独で文としての意味内容を表す「名詞句+関係節」〈 Le facteur qui passe ! 〉(1)は、(2)のような「名詞句+動詞句」で表される通常の文タイプと異なり、統語的に主動詞を持たないように見える。

- (1) Le facteur qui passe !
- (2) Le facteur passe !

そのため(1)のような文タイプは、(3)のような提示詞を含む文タイプや、主動詞として知覚に関わる動詞を含む(4)のような文タイプとの関係をもとに考察が行われてきた。

- (3) { C'est / Il y a / Voilà } le facteur qui passe !
- (4) J'ai vu le facteur qui passait.

特に、これら(1)(3)(4)のような文タイプに含まれる関係節は「擬似関係節」と呼ばれ、「名詞句+関係節」でひとまとまりの命題内容を表すという点で通常の関係節とは区別される。また、関係節内の述語に個体の恒常的性質を表す個体レベル述語を許容しないことから(5)、(1)の文タイプについては「知覚現場への密着性」(金子 2003)を持つ文であること、(3)の IL Y A 眼前描写文タイプについては「話し手・聞き手の眼前という時空間的に狭く限定された場面での事態を述べる文」(東郷 2009)であることが指摘されている。

- (5) a. *Le facteur qui est grand ! (金子 2003)
- b. Regarde ! *Il y a Paul { qui est grand / qui a les yeux bleus } ! (東郷 2009)

本発表においては、単独で文として成立する「名詞句+関係節」と VOILA 「名詞句+関係節」との間に、(6)(7)のように容認度に差がでる場合があることに着目する。その上で、前場面からの場面転換を表現する VOILA 「名詞句+関係節」は、知覚による気づきという場面を分割する時点を必要とするのに対し、単独の「名詞句+関係節」は瞬間的で前場面を持たず、目の前で突然予告なしに起きた事態を表現する「現象文」として成立することを説明する。

- (6) a. Le vase qui tombe !
- b. ?Voilà le vase qui tombe !
- (7) a. ?L'eau qui bout !
- b. Voilà l'eau qui bout !